

ヨブ記（「舊約聖書」）其の一

紀元前四五世紀頃に作られた話である。パレスティナのウヅの地にヨブといふ名の富豪がゐた。七人の息子と三人の娘に恵まれ、多くの家畜を持ち、幸せに暮してゐたが、何よりも「完全まったくかつ正しくして神を畏れおそ悪に遠ざかる」信仰の篤さによつて知られてゐた。

或日、天上で神の許に「神の子等」が集り、サタンもその中にゐた。神がサタンに、ヨブ程「神を畏れ悪に遠ざかる人世にあらざるなり」と云ふと、サタンが答へる、「ヨブあにもとむることなくして神を畏れんや」、「汝の手を伸べて彼の一切の所有物もつものを撃うてば、ヨブは必ず汝を呪はん。神は云ふ、それならヨブの持物の一切をお前に任せよう、が、「かれの身に汝の手をつくる勿なれ」。

やがてヨブは突如次々に災厄に襲はれ、財産を失ひ、子供達にも死なれて仕舞ふ。然るに、ヨブは上衣を裂き地に伏して云ふ、「我裸にて母の胎たいを出たり又裸にて彼處かしこに歸らん」、神は與あ

へかつ取り給ふ、神の御名は讃むべきかな。かうしてヨブは「全く罪を犯さず神にむかひて愚かなることを言は」なかつた。

或日、神の許に又「神の子等」が集り、サタンもゐたが、神がサタンに、お前は「われを勧めて故なきに」ヨブを苦しめさせたが、ヨブは罪を犯さなかつたではないか、と云ふと、今度はサタンはかう答へる、「なんぢの手を伸べて彼の骨と肉とを撃」てば、ヨブは必ず汝を呪はん。神は云ふ、ヨブをお前に任せよう、が、「只かれの生命を害ふ勿れ」。

サタンはやがて「ヨブを撃ちて」全身に「悪しき腫物を生ぜしむ」る。ヨブは狂はんばかりの痒みに苦しみ灰の中に坐り焼物の碎片で全身を掻きむしる。この期に及んで「尙も己を完う」せんとするか、「神を詛ひて死するに如ず」と妻は云ふが、「愚かなる婦の言」だとしてヨブはそれを斥け、「その唇をもて罪を犯」す事が無かつたのである。

以上が冒頭の二章であり、サタンの「ヨブあにもとむることなくして神を畏れんや」と云ふ臺詞は、舊約の神の要求する信仰の本質を凝縮した言葉と云へよう。舊約の神とは、人間が何も「もとむることなくして」、即ち信仰への如何なる見返りをも期待せずして、只管畏れ敬はねばならぬ存在なのであり、「完全かつ正し」い信仰者とされるヨブは、不幸ならざる生とい

ふ見返りを神に「もとむる」事も決して無い道理だから、それを與へてくれぬとて神を呪ふ事もあつてはならない。ヨブが神を呪へば、それはサタンの言葉の正しさを證明する事にしかない。

これを要するに、舊約の神とは、人間の欲求や願望や理解を絶した存在なのであつて、さういふ絶對者の恐るべき神祕性は舊約の昔から西洋人の心を捉へ續けて來た。誰が救はれるか救はれないかは神が豫め定めてをり、人間には決して解らないとするカルヴァンの豫定説の神も、人間の目には「神は隠されてゐるといふ事を肯定しない宗教は眞實ではない」とするパスカルの「隠れ在す神」も、神は人間との「如何なる約束にも義務にも縛られぬ」とするジョン・エドワーズの「怒れる神」も、何れも被造物との決定的な斷絶を本質と成してをり、「古事記」の昔から八百萬の神々の集ふこの秋津島の文化とは全く無縁の神である。

それに又、神自身が認めてゐる通り、ヨブは「故なきに」苦しめられる譯だが、R・シウォールの云ふやうに、さういふヨブは「オイディプスやプロメテウスをも凌ぐ不當な苦難の象徴」として、これ又現代に至る迄西洋人の心を捉へて離さないのである。